平成３０年度 図画工作部会研究計画

１ 研究主題

豊かにかかわり つながり 自らつくりだす造形活動
－主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を通して－

２ 研究主題設定にあたって

造形活動では，子供が材料と向き合って自分の中で対話を繰り返す場面がよくある。それは，「ううん，どうしよう」「いいこと考えた」「そうだ，ここを○○に変えてみよう」という「心のつぶやき」などに表れ，発想や構想が働いているまさにその瞬間である。子供自身が，造形的な見方・考え方を働かせ資質・能力を発揮し，「学んでいる」瞬間ともいうことができる。このような学びの瞬間は，図画工作科の学習過程にはよく見られることである。また，近くの友達との対話やその製作過程からヒントを得て，迷っていたことを解決したり，自分の表現に生かし高めたりしていくということも珍しいことではない。どのような題材であったとしても，子供たちにこのような充実した楽しい学びの時間を十分に味わわせたい。つまり，図画工作科の授業において，そのような対話ができる仕組みや時間・環境等を教師が意図して設定し，子供たちの学びを深める手立てとすることは，むしろ必然である。

これまで，図画工作部会は，ものをつくる活動における学びの過程を丹念に見直してきた。平成２８年度からは，それまでの研究主題「かかわり　つながり　自らつくりだす造形活動」から得られた研究成果を生かし，主題に「豊かに」を加え，図画工作部会の課題である「自分の表したいことを創造的な技能を働かせて，主体的に表現しようとする子供の育成」に取り組んだ。その結果，子供たちが自分の思いを大切にして題材とかかわり，表現や鑑賞の過程を通して「ひと」「もの」「こと」へとつながることで，主体的に造形活動に取り組もうとする態度を育てることができると実感した。

また，昨年度は「自分の思いを大切にして，つくりだす喜びを味わうことができる授業づくり」という副主題を掲げ，「表現内容」，「表現材料」，「表現方法」と豊かにかかわらせることで，子供たちは思いを明確にし，その思いを実現しようと主体的に取り組んでいくような授業づくりを行った。その中で，自分と違った発想や表現の工夫に気付いたり，自分の表現の幅を広げたりしながら，表現の質が高まり，つくりだす喜びを味わう姿が多く見られるようになった。

今年度は，これまで実践してきた図画工作部会の取組の成果を生かしつつ，平成２９年３月の小学校学習指導要領の改訂で示された「三つの資質・能力」の側面から，図画工作科の指導内容を整理した。また，「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善を行うことで，造形活動の中で子供自身が実感を伴いながら学びを深め，学びの質を高めていくことが重要であると考えた。

そこで本主題を，昨年度に引き続き「豊かにかかわり つながり 自らつくりだす造形活動」，副主題を「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を通して」とした。移行期間である平成３０年・３１年度の２年間で，改訂の趣旨を生かした指導になるような研究の方向性や具体的な改善策を明らかにし，図画工作科の指導の工夫・改善を図っていく。

３ 研究主題についての考え方

（１）「豊かにかかわり」とは

これまで，図画工作部会では，造形活動において，「表現内容」（何を），「表現材料」（何で），「表現方法」（どのように）といった３つの要素を明確にした授業づくりに取り組んできた。表現活動では，子供が，この３つの要素をしっかりとつかむことにより，自らつくりだす活動が促されると考える。自分の表したいことが決まっている子供は，主体的に製作に取り組みながら，何を使って表すのかということにも積極的にかかわっていくようになる。鑑賞活動では，３つの要素を基に友達の作品を見ることで，自分なりの考えをもったり，感じ取ったりしやすくなる。そのとき感じた思いは，自分の表現活動を広げたり深めたりすることにもつながる。大切なことは，子供自身が３

つの要素と「かかわり」，自分の思いを大切にして，主体的に表現や鑑賞の活動に取り組むことができるようになるかである。

例えば，材料は子供と「表現内容」とのかかわりによって「表現材料」となる。また，「表現材料」から「表現内容」が明確になる場合もある。そして，子供はつくりながら自分の思いに合う「表現方法」を見付けていく。表したいことに向かって，材料を変えてみたり，ぬり方や色を変えてみたりと，「つくる」中で「つくりかえる」が生まれる。教師が，子供の「自分はこう表したい」という表現の欲求を大切にし，題材を設定したり授業を組み立てたりすることで，子供は３つの要素とより豊かにかかわり，主体的に造形活動に取り組むことができる。

（２）「つながり」とは

活動中に交わされる教師と子供，また子供同士の対話の中には，自分の表現を認めてくれる言葉に自信をもったり，ひらめきを得たりして，どんどん活動に熱中していく子供の姿がある。友達の行為や，それから受ける自分の感覚から，新しい発想を生み出すこともある。このように周囲とつながったり，認められたり，刺激を受けたりする体験が，表現への意欲を高めることにつながっていく。適宜，グループでの学習を設定することで，材料や場所とのかかわりの中から生まれた気付きや発想を，交流したり話し合ったりしながら，発想や構想にかかわる能力を高めることもできる。異学年集団で活動したり，作品を校内外に展示する機会を設けるなど，活動や作品を介して周りの人たちと交流をもつ場合も同様である。そこで得られる共感や賞賛の言葉から，表現することへの喜びを実感することができる。

授業展開の中で「ひと」「もの」「こと」とつなげていく場を設定することで，「思った通りにできた」「思いをうまく伝えられた」という達成感や，「つくって喜んでくれた」といった自己肯定感が高まる。さらに，「見てもらいたい」「喜んでもらいたい」などの他者意識をもって製作に臨むことで，よりよいものをつくろうとする意欲の高まりが一層期待できる。子供たちが表現や鑑賞の活動を通して交流し，互いの表現の違いやよさを認め合ったり，他者意識をもって表現したりすることで，造形活動の楽しさやすばらしさを体感できるような活動を大切にしたい。また，そのとき味わった喜びや意欲が「話したり，聞いたりする」「話し合ったりする」「交流する」必要感や必然性を生み出し，言語活動の意味付けとともに，充実を図っていくことにもつながる。子供たちが，自分たちの思いを大切にした表現や鑑賞の活動を実現することで，さらに周りの「ひと」「もの」「こと」へのつながりを深めていく。

このように，学びの喜びを実感させ，つながりを深めていくことが，主体的に表現や鑑賞の活動へ取り組む意欲を生み，次の活動へと結び付くことになる。

（３）「自らつくりだす造形活動」とは

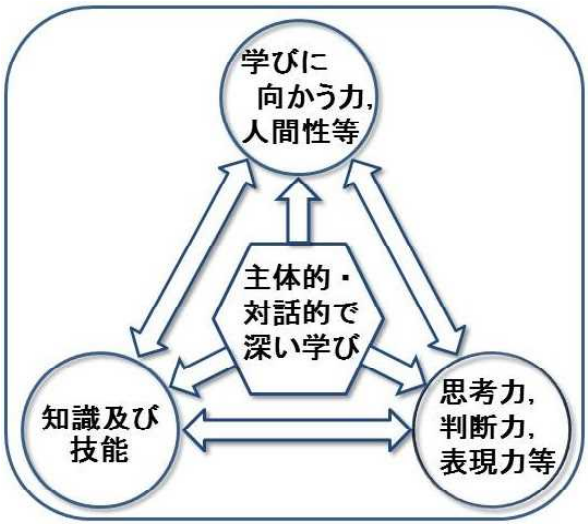
図画工作科では，深い学びにつながる「見方・考え方」を「造形的な見方・考え方」と捉えている。「造形的な見方･考え方」とは，自分の感性や想像力を働かせて，形や色，質感などにかかわり，つくりたいものや表したいもののイメージを明確にして表現したり，鑑賞を通して自分なりの意味を見いだしたりすることである。つまり，図画工作科では，完成された作品だけでなく，その活動の過程において新しい価値をつくりだすことに教科の本質がある。

「自らつくりだす造形活動」とは，表現と鑑賞の活動において，子供たちが形や色などから感じたことを基に自ら働きかけ，自分で新たな意味や価値をつくりだす創造的な活動である。作品は，自分にとっての大切なものとなったり，見る人に感動を与える存在になったりもする。また，その製作過程において，自分の表現へのこだわりや作品への思い入れが強まることなども，新たな意味や価値をつくり出したといえる。３つの要素と豊かにかかわり，「ひと」「もの」「こと」とつながりながら，自らが思考・判断し，自己決定をすることで新しい価値が生まれるのである。

（４）「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」とは

新学習指導要領では，授業改善に向けて「題材など内容や時間のまとまりを見通して，その中で育む資質・能力の育成に向けて，子供の主体的・対話的で深い学びの実現を図るようにすること。その際，造形的な見方・考え方を働かせ，表現及び鑑賞に関する資質・能力を相互に関連させた学

習の充実を図ること。」と示された。この事項は，図画工作科の指導計画の作成に当たり，子供の「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指した授業改善を進めることとし，図画工作科の特質に応じて，効果的な学習が展開できるように配慮すべき内容を示したものである。また，その際，新しく示された教科で育てるべき資質・能力の「三つの柱」である「知識及び技能」「思考力，判断力，表現力等」「学びに向かう力，人間性等」を涵養することが偏りなく実現されるよう，題材など内容や時間のまとまりを見通すことが大切である，とされている。



これら「三つの資質・能力」は，子供が題材や自分と向き合いながら，他者や社会，自然や環境などとの多様なつながりをもって活動することによって育つもので，それぞれを相互に関連させながらバランスよく育成を図る必要がある。

教師が，その題材で育成する資質・能力を明確にし，子供たち自身の造形的な資質・能力が強く発揮されるような場を適切に設定することが授業改善となる。そして，生活や社会の中で形や色などと豊かに関わる資質・能力へとつなげる意識をもつことが大切である。

4 研究内容

図画工作科における「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善のためには，子供一人一人が「造形的な見方・考え方」を働かせ，表現及び鑑賞に関する資質・能力を相互に関連させた学習の充実を図ることが大切である。育成を目指す「三つの資質・能力」は，相互に関連し合い一体となって働くものであり，必ずしも，別々に分けて育成したり，順序性をもって育成したりするべきではない。教師が，系統性を考慮に入れながら，その題材で育む資質・能力を見極め，本時のねらいを設定し，授業展開を工夫するために，次のことを研究していく。

（1）「何を学ぶか」を明確にした指導計画の作成

子供に育成する資質・能力を明確にした上で，これまでの経験を生かしながら資質・能力を向上させ，「造形的な見方・考え方」を働かせることができるような題材を選択・配列し，適正な評価を考慮し指導計画を作成する。その際，子供の学習意欲を高めるために発達段階に応じて，系統性を踏まえた学びが展開できるように工夫する。また，地域の実情や各教科等との関連を意識した題材の設定を行うことも大切である。

指導計画の作成の際には，「A表現（1）ア，イ」と「A表現（2）ア，イ」，また「B鑑賞（1）ア」のバランスや〔共通事項〕（1）ア，イの視点から指導計画や内容，方法を検討し，目標の設定や具体的な指導と評価を考えることにも留意していきたい。

これまでの研究において，子供の発達段階に応じて，幼稚園，小学校，中学校の内容の連続性に配慮することも「つながり」ととらえ，育成する資質や能力と学習内容との関係を明確にし，年間指導計画や題材設定，指導方法等を工夫してきた。

今後も，学びの連続性を踏まえた系統的な指導計画の作成を重視する。

（2）「どのように学ぶか」主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善の視点

「主体的・対話的で深い学び」を，不断に授業を改善する「視点」としてとらえ，常に「子供主体の授業だったか」「指示や説明に終始せず，子供の考えや意見を取り上げる場を設定できたか」などを，子供の学びの質を向上させる視点としたい。

子供が「主体的」に学習に取り組めるよう，子供の表現欲求に合わせたり，必要性のある題材を選択したりすることや，学習の見通しを立てるなど，子供自らが主体的に表現に取り組もうとするような場面設定を行うことなどが大切である。

一人一人が資質・能力を十分に働かせることができる学習活動にするために，例えば，材料について，子供に探し集めさせることも資質･能力を高めさせることになるだろう。また，教師が近隣にある自然材や人工材などの材料や場所をうまく取り入れたりするなどして，子供がふれる材料や環境を幅広く用意する。そのようなことからも，主体的に取り組もうとする意欲の高まりとともに，造形活動の充実が期待できる。

子供の中で，「自分の見方・考え方」が鍛えられていくように，図画工作科においても「対話」によって自分の考えなどを広げたり深めたりする場面をどこに設定するかという点に留意する。その際，「この形や色でよいか」「自分の表したいことは表せているか」など，子供が自分の行為や活動を振り返り，感じたり，考えたりできるようにすることで，自分の成長やよさ，可能性などに気付き，次の学習への意欲へとつなげられるようにする。また，友達に紹介したくなる，話し合いたくなる場面を授業展開の中で適切に設定し，互いの活動や作品を見合いながら考えたことを伝え合ったり，思ったことを話し合ったりするなどの言語活動を一層充実することが大切である。そして，教師との対話，子供同士の対話だけでなく，保護者や地域，社会の人と交流する機会を設定することも考えられる。

さらに，「つくり，つくりかえ，つくる」という学習過程を通して，子供は自ら発想・構想 ・表現をし，その表現からまた新たな発想をして表現し続ける。この道程こそが「深い学び」につながっていく。そのため，発想や構想の段階での指導のあり方をより一層重視したい。また，一連の過程を通して，子供自らが自分の学びを振り返る場面も必要となる。

（3）「何ができるようになるか」資質・能力の育成と，指導に生きる評価の工夫

新しい「三つの柱」を中心とした，指導と評価の一体化を一層進めていく。子供一人一人が表現活動の中で，どのような力を発揮しているのかを目の前の子供の姿から見取り，一人一人のよさを認め，子供たちに表現への自信と喜びを味わわせ，更なる表現への意欲をもたせたい。そのため，完成された作品だけでなく，その過程に目を向け，育てたい資質や能力の発揮状況を適切に評価し，共感と支援を通して，子供一人一人の造形活動への意欲，資質や能力を高める指導につなげていくことが重要となる。活動中の姿を評価することは，指導（支援）する時の手がかりとなり，「指導と評価」は常に一体となっていることを認識しておく。

平成３０年・３１年度は，新学習指導要領に示された「三つの資質・能力」にともなう観点「知識及び技能」「思考力，判断力，表現力等」「主体的に学習に取り組む態度（学びに向かう力，人間性等)」への移行に向けた研究を進めていく必要がある。

造形への関心・意欲・態度
発想や構想の能力
創造的な技能
鑑賞の能力

⟹

知識及び	技能
思考力，判断力，表現力等	
主体的に学習に取り組む態度（学びに向かう力，人間性等）	

しかし，現段階では小学校児童指導要録の４観点での評価に変更はないため，評価の進め方については次の事項に留意する。

①各学年で育成する資質や能力，学習内容，子供の実態を考慮し題材の目標を設定する。
②設定した目標について〔共通事項〕の視点から各観点の評価規準を設定する。
③評価規準を「指導と評価の計画」に位置付ける。
④評価方法や評価資料を明確にする。
⑤「造形への関心・意欲・態度」「発想や構想の能力」「創造的な技能」「鑑賞の能力」の観点ごとに評価を行う。その際，子供自身が自らの学びを振り返って次の学びへ向かうことができるように，自他の作品や取組・行為のよさについて記述したり，話し合ったりする自己評価や相互評価等を用いた場を設定する。また，子供自身が自らの学びを実感できるように，子供の表現や思考を具体的に見取る評価や，学習の過程における一人一人の学びの評価の仕方を工夫したり，ポートフォリオ，デジタル記録やワークシートなど多様な評価方法を活用したりすることなど，指導に生きる評価へと取り組んでいく。

５ 研究方法

（１） 本年度は美馬郡・美馬市を中心として研究計画を立て，研究や授業実践を通して研究内容の解明を図る。また，研究主題に迫るために，各部会では次の中から重点的に取り組むものを選定し実践していく。

低学年部会	○　対象や事象を捉える造形的な視点について自分の感覚や行為を通して気付くとともに，手や体全体の感覚などを働かせ材料や用具を使い，表し方などを工夫して，創造的につくったり表したりすることができるようにするにはどうすればよいか。 ○　造形的な面白さや楽しさ，表したいこと，表し方などについて考え，楽しく発想や構想をしたり，身の回りの作品などから自分の見方や感じ方を広げたりすることができるようにするにはどうすればよいか。 ○　楽しく表現したり鑑賞したりする活動に取り組み，つくりだす喜びを味わうとともに，形や色などに関わり楽しい生活を創造しようとする態度を養うにはどうすればよいか。
中学年部会	○　対象や事象を捉える造形的な視点について自分の感覚や行為を通して分かるともに，手や体全体を十分に働かせ材料や用具を使い，表し方などを工夫して，創造的につくったり表したりすることができるようにするにはどうすればよいか。 ○　造形的なよさや面白さ，表したいこと，表し方などについて考え，豊かに発想や構想をしたり，身近にある作品などから自分の見方や感じ方を広げたりすることができるようにするにはどうすればよいか。 ○　進んで表現したり鑑賞したりする活動に取り組み，つくりだす喜びを味わうとともに，形や色などに関わり楽しく豊かな生活を創造しようとする態度を養うにはどうすればよいか。
高学年部会	○　対象や事象を捉える造形的な視点について自分の感覚や行為を通して理解するとともに，材料や用具を活用し,表し方などを工夫して，創造的につくったり表したりすることができるようにするにはどうすればよいか。 ○　造形的なよさや美しさ，表したいこと，表し方などについて考え，創造的に発想や構想をしたり，親しみのある作品などから自分の見方や感じ方を深めたりすることができるようにするにはどうすればよいか。 ○　主体的に表現したり鑑賞したりする活動に取り組み，つくりだす喜びを味わうとともに，形や色などに関わり楽しく豊かな生活を創造しようとする態度を養うにはどうすればよいか。

※各部会テーマは，育てるべき「三つの資質・能力」に対応するものを示しており，郡市や学校，児童の実態によって３つの事項を選択し実践してもよい。

（２） 各郡市研究会は，研究主題の解明に向けて共通理解を図り，研究や授業実践を行う。

（３） 研究成果をまとめ，研究集録（第５５集）を発刊する。

参考文献：「小学校学習指導要領図画工作編（平成２９年６月）」文部科学省
「なるほど！そうか！学習指導要領　新・図工のＡＢＣ」　阿部宏行　日本文教出版 2017
「よくわかる図画工作科 なっとく新学習指導要領 授業への生かし方」
小林貴史／北澤俊之／小林恭代／大橿重剛　　開隆堂 2017
「平成２９年度版 小学校新学習指導要領 ポイント総整理 図画工作」
阿部宏行　　東洋館出版社 2017
「初等教育資料 2017 年 6 月号・12 月号」　東洋館出版社